社会福祉施設側から見た「介護等体験」の現状と課題

和田　美知子
佐藤　嘉晃
藤田　主一

Ⅰ．研究の目的

平成10年4月1日から実施された教職課程における「介護等体験」は，小学校・中学校の教員を目指している大学および短期大学の学生を対象に，高齢者や障害児（者）等への介護や介助またはこれらの人びととの交流を体験するものである。文部省令により，学生は7日間を下回らない範囲で社会福祉施設や特殊教育諸学校等でこれらを体験し，その終了証明書が教員免許状の申請時に必要となった。

私たちは，法律施行後に初めて体験した短大生を皮切りに，教職課程を履修する大学2年生と4年生を対象として「介護等体験」の意識と実態を調査し，報告した[1),2),3)]。

今回は上記研究の一環として，学生の体験を受け入れている社会福祉施設の協力を得て，施設職員を対象にアンケート調査を実施した。これにより，受け入れ施設側から捉えた「介護等体験」の現状と課題を明らかにする。

Ⅱ．研究の方法

1．調査対象者

本研究では，介護等体験学生を受け入れている東京都内の社会福祉施設360ヶ所に調査用紙を郵送し，そのうち218ヶ所から回答を得た（1施設1回答で，回収率60.6%）。

2．調査材料

本研究で用いた調査材料は，以下のとおりである。

(1)　回答者のフェイスシート

『あなたご自身（本調査のご記入者）についてお尋ねします。当てはまる項目に✓印，および必要事項をご記入ください。なお，ご回答は，施設単位でお願い致します。』という教示に続い

て，①性別，②年齢，③勤続年数，④勤務先，⑤職種の５項目について，それぞれの選択肢を用意した。

(2) 受け入れ担当者について

『受け入れ担当者について，おうかがいします。当てはまる回答項目に✓印をお付けください。』という教示に続いて，①「専任ですか，兼務ですか？」，②「常勤ですか，非常勤ですか？」の２つの質問に，それぞれ２つの選択肢を用意した。

(3) 「介護等体験」の実施状況について

『以下の各質問について，当てはまる回答項目に✓印をお付けください。』という教示に続いて，①「平成10年から開始した本事業の受け入れは，平成13年度で何回目ですか？」，②「今年度の受け入れ人数（年間の実人員）は何人でしたか？」，③「学生への施設オリエンテーションは実施されましたか？」，④「体験の振り返りや反省会の時間を持たれましたか？」の４つの質問に，それぞれの選択肢を用意した。

(4) 「介護等体験」について，さらに『以下の各質問について，ご回答ください。』という教示に続いて，次の設問に回答してもらった。

①『介護等体験生の受け入れの目的・理由は何ですか？　次の中から優先順位の高い項目を３つ選んで，項目番号をお書きください。』という設問について，８つの選択肢を用意した。

②『受け入れにあたっての施設の課題は何ですか？　次の中から優先順位の高い項目を３つ選んで，項目番号をお書きください。』という設問について，７つの選択肢を用意した。

③『学生にどのような「体験」プログラムを提供しましたか？　それぞれの項目の「はい・いいえ」に○印をお付けください。』という設問について，10項目を用意した。

④『「体験」を終了した学生の態度は，全般的にどうでしたか？　以下の項目に当てはまる学生はどのくらいずつでしたか？　おおよその比率（パーセント）でお答えください。１～４を合計して100％になるようにお願いします。』という設問について，「１非常に熱心に取り組んでいた」「２熱心に取り組んでいた」「３あまり熱心ではなかった」「４まったく熱心ではなかった」の４項目を用意した。

⑤『体験中に，大きなトラブルや事故などが生じましたか？　○印をお付けください。』という設問に対して，「はい」という選択肢には，さらに『生じたことに○印をお付けください。』として，９つの選択肢を用意した。

⑥『「体験」前の学生にどのようなことを要望しますか？　次の中から優先順位の高い項目を３つ選んで，項目番号をお書きください。』という設問について，６つの選択肢を用意した。

⑦『「体験」を通して学生に１番期待することは何ですか？　１つに○印をお付けくださ

い。』という設問に対して，6つの選択肢を用意した。

⑧『「体験」に参加した学生に関する問題点，課題は何ですか？　次の中から優先順位の高い項目を3つ選んで，項目番号をお書きください。』という設問に対して，8つの選択肢を用意した。

⑨『大学等派遣先へどのようなことを要望しますか？　次の中から優先順位の高い項目を3つ選んで，項目番号をお書きください。』という設問に対して，8つの選択肢を用意した。

⑩『「体験」が教員養成（特に教員の資質向上）にとって意味があると思いますか？　1つに○印をお付けください。』という設問に対して，5つの選択肢を用意した。

(5) 体験学生に対する「期待」と「現状」について

①「※以下の質問には，学生を直接ご指導いただいた方にご回答をお願いいたします。」と指示した上で，『「介護等体験」に参加する学生には，次のような心構えや態度等がどの程度必要だとお考えですか？　各項目ごとに，当てはまる番号（5～1）に○印をお付けください。』という設問について43項目を示し，それぞれの項目について“5絶対に必要である”“4ある程度必要である”“3どちらともいえない”“2あまり必要ない”“1ほとんど必要ない”の5件法で回答を求めた。

②「※以下の質問にも，学生を直接ご指導いただいた方にご回答をお願いいたします。」と指示した上で，『今年度「介護等体験」に参加した学生についての全般的な印象は，どの程度でしたか？各項目ごとに，当てはまる番号（5～1）に○印をお付けください。』という設問について43項目を示し，それぞれの項目について“5非常にそう思う”“4ややそう思う”“3どちらともいえない”“2あまりそう思わない”“1全然そう思わない”の5件法で回答を求めた。

3．手続き

調査用紙は，平成14年2月10日頃に各施設の施設長宛に郵送した。質問に対しては，選択肢または自由記述欄を示して回答してもらった。なお，集計に用いたのは平成14年3月末までに返送されたものである。

III．結果と考察

1．回答者のフェイスシート

(1) 性別・年齢・勤続年数・職種

表1は，回答者（アンケートの記入者）の性別と年齢とのクロス集計表，**表2**は，同じく性別と勤続年数とのクロス集計表である。回答者は男女ほぼ半数ずつで，年齢は30歳代～50歳代が75.6%，勤続15年以内が72.5%である。

表１　回答者の性別と年齢のクロス表（人）

	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代	合計	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
男性	13	27	40	21	12	1	114	52.3%
女性	19	28	20	29	8	0	104	47.7%
合計	32	55	60	50	20	1	218	100.0%
ﾊﾟｰｾﾝﾄ	14.7%	25.2%	27.5%	22.9%	9.2%	0.5%	100.0%	

表２　回答者の性別と勤続年数のクロス表（人）

	５年以内	10年以内	15年以内	20年以内	25年以内	26年以上	合計	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
男性	29	23	26	15	16	5	114	52.3%
女性	23	38	19	10	11	3	104	47.7%
合計	52	61	45	25	27	8	218	100.0%
ﾊﾟｰｾﾝﾄ	23.9%	28.0%	20.6%	11.5%	12.4%	3.7%	100.0%	

表３　回答者の職種

	職　　種	人数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
①管理職	施設長	30	13.8%
②相談・援助・介護職	生活相談員・支援相談員・生活指導員・指導員	91	41.7%
	介護職員	32	14.7%
	児童指導員・母子指導員・少年指導員	13	6.0%
	作業指導員・職業指導員	8	3.7%
	保育士	3	1.4%
	精神保健福祉士	1	0.5%
③事務職員	事務員	19	8.7%
④医療・看護職員	看護婦（士）	4	1.8%
⑤その他	その他	17	7.8%
	合　　計	218	100.0%

回答者の職種は，**表３**に示したとおり，生活相談員・生活指導員等が４割を超えている。その他は，ケア・マネージャーなどであった。

(2)　回答のあった施設の種類の内訳

質問紙では，施設の種類は次のように分類した。

①生活保護法による施設

救護施設　更生施設

②社会福祉法による施設

授産施設

③児童福祉法による施設

乳児院　母子生活支援施設　児童養護施設　児童自立支援施設

知的障害児施設（知的障害児施設／自閉症児施設）

盲ろうあ児施設（盲児施設／ろうあ児施設／難聴幼児通園施設）

肢体不自由児施設（肢体不自由児施設／肢体不自由児通園施設）

重症心身障害児施設

④身体障害者福祉法による施設

身体障害者更生施設（肢体不自由者更生施設／視覚障害者更生施設／
聴覚・言語障害者更生施設／内部障害者更生施設／
重度身体障害者更生援護施設）

身体障害者療護施設

身体障害者授産施設（身体障害者授産施設／重度身体障害者授産施設／
身体障害者通所授産施設／身体障害者福祉工場）

⑤知的障害者福祉法による施設

知的障害者更生施設（知的障害者更生施設・入所／知的障害者更生施設・通所）

知的障害者授産施設（知的障害者授産施設・入所／知的障害者授産施設・通所／
知的障害者福祉工場）

⑥精神保健及び精神障害者福祉に関する法による施設

精神障害者生活訓練施設

精神障害者授産施設・通所

⑦老人福祉法による施設

特別養護老人ホーム　養護老人ホーム　高齢者在宅サービスセンター

⑧介護保健法による施設

介護老人保健施設

⑨告示により指定されている施設

身体障害者デイサービス事業を行う施設

在宅知的障害者デイサービス事業を行う在宅知的障害者デイサービスセンター

地域福祉センター

有料老人ホームのうち，介護サービス提供を行うことを入居契約で定めているもの

種類が多いので，①～⑨の大分類の方を用いて集計した結果を**表4**に示した。最も多かったのは老人福祉法による施設で，5割を超えている。専門的な知識を持たない一般学生にもできる仕事がないと，「介護等体験」の受け入れは難しいと思われる。

2．受け入れ担当者について

「福祉実習・ボランティア・介護等体験などの受け入れを専任で行っているか，または本来業務のほかに兼務で介護等体験生の受け入れを行っているか」という質問には，90.8%が「兼務で

表 4　回答のあった施設の種別内訳

施設の種別	施設数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
⑦老人福祉法による施設	111	50.9%
⑤知的障害者福祉法による施設	42	19.3%
③児童福祉法による施設	20	9.2%
⑨告示により指定されている施設	14	6.4%
④身体障害者福祉法による施設	13	6.0%
②社会福祉法による施設	8	3.7%
⑧介護保健法による施設	6	2.8%
⑥精神保健及び精神障害者福祉に関する法による施設	3	1.4%
①生活保護法による施設	1	0.5%
合　　計	218	100.0%

ある」と回答した。また，受け入れ担当者の95.4%が常勤であった。

3.「介護等体験」の実施状況について

(1)　「「介護等体験」の受け入れは平成13年度で何回目か」という質問に対し，回答は，「4回目」28.2%，「3回目」26.9%，「2回目」21.8%，「初めて」23.1%（無回答2）であった。

(2)　平成13年度の受け入れ人数は，**表 5** に示したとおりである。全体の8割以上の施設の受け入れが50人以内であった。

表 5　平成13年度の受け入れ人数

人　　数	施設数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
1人～10人以下	81	37.5%
11人～25人以下	58	26.9%
26人～50人以下	38	17.6%
51人～75人以下	14	6.5%
76人～100人以下	7	3.2%
101人～150人以下	12	5.6%
151人～200人以下	5	2.3%
201人～250人以下	0	0.0%
251人～300人以下	1	0.5%
合　　計	216	100.0%
無回答	2	

(3)　学生への施設オリエンテーションは，99.1%の施設が「実施した」と答えた。そのうち74.5%が初日に，24.1%が体験日前に実施していた。

(4)　反省会は，全体の50.5%の施設が最終日に実施，22.5%の施設が毎日実施，15.6%の施設が随時実施していた。また，反省会の時間は持たなくても，全体の10.1%の施設では，「学生の

日誌記入や感想文の提出に代えた」と回答している。

4.「介護等体験」について

(1)　介護等体験生の受け入れの目的・理由を，８項目の中から３つ選んでもらった。用意した８項目の内容は，次のとおりである。後のかっこ内の数値は，全く無回答だった１ケースを除いた217施設のうち，その項目を選択した施設の割合を示している。なお，平均回答数は2.9個であった。

①「社会福祉施設の役割や福祉サービス利用者等の理解が促進される」(85.7%)

②「教職を志望する学生にとって，この体験は意義がある」(73.7%)

③「体験学生の受け入れが利用者の援助にプラスになる」(45.2%)

④「学生の意見や感想が施設にとってよい刺激になる」(33.2%)

⑤「法律で決まった体験なので，受け入れの責任があると考えている」(31.3%)

⑥「体験後，学生が施設でボランティア活動することが期待できる」(14.7%)

⑦「施設経営の観点から体験費用収入を重視している」(6.9%)

⑧「その他」(3.7%)

(2)　受け入れにあたっての施設の課題を，７項目の中から３つ選んでもらった。用意した７項目の内容は，次のとおりである。この設問には「受け入れる施設側に問題はない」等の意見が散見され，無回答が25ケースとなった。各項目の後のかっこ内の数値は，回答した193施設のうち，その項目を選択した施設の割合を示している。なお，平均回答数は2.6個であった。

①「受け入れや指導にあたっての職員体制が整わない」(68.4%)

②「体験プログラムの検討が十分でない」(66.3%)

③「施設内で職員同士の共通理解が十分でない」(38.9%)

④「福祉実習やボランティア体験学習等以外に受け入れの枠（人数）を確保しにくい」(37.8%)

⑤「受け入れの積極的意義を見出せない」(22.8%)

⑥「施設の性格や利用者の状況から，体験生（一般学生）の受け入れが難しい」(17.6%)

⑦「その他」(10.9%)

初年度の調査では，学生の側からも「体験生と実習生との区別がついていない」「頭から馬鹿にする」等の不満が多かったが，回数を重ねて改善されることを期待したい。

(3)　10項目の「体験」プログラム（**表6**参照）を提示して，学生にそのプログラムを提供したかどうかを質問した。施設の特性によりプログラムの内容は異なるはずなので，数の多い５種類の施設（**表4**参照）をピックアップして，**表6**にまとめた。網を掛けた箇所は，６割以上の施設が実施した「体験」プログラムである。

表6　提供した「体験」プログラム

「体験」プログラム＼施設の種類	⑦老人福祉法	⑤知的障害者	③児童福祉法	⑨告示により	④身体障害者	全　体
①学習活動や勉強会	24.5%	24.4%	70.0%	14.3%	53.8%	31.0%
②花見やクリスマス，誕生会等，施設行事	89.2%	66.7%	70.0%	85.7%	92.3%	80.3%
③趣味活動やスポーツ・レクリエーション活動	93.7%	81.0%	70.0%	92.9%	61.5%	85.8%
④一緒に話す・遊ぶ・散歩するといったこと	99.1%	88.1%	100.0%	92.9%	76.9%	95.0%
⑤食事の準備や配食・下膳の手伝い，食事介助	91.9%	61.9%	80.0%	85.7%	53.8%	78.4%
⑥入浴・衣類の着脱やリハビリ・生活習慣の援助	49.5%	52.4%	45.0%	71.4%	23.1%	47.9%
⑦洗濯・掃除・ベッドメイク・おむつたたみなど	67.6%	26.2%	50.0%	64.3%	30.8%	52.3%
⑧排泄の手助けや排泄介助	22.5%	33.3%	45.0%	50.0%	23.1%	28.0%
⑨授産作業や製品の運搬や販売等	1.8%	61.9%	5.0%	7.1%	76.9%	22.9%
⑩利用者の送迎の介助や送迎車への同乗	58.6%	11.9%	10.0%	42.9%	15.4%	38.5%

(4)　「体験」を終了した学生の態度を全般的にどう感じたか，おおよその比率（パーセント）で回答してもらった。4つを合計して100%にならないケースを除き，207ケースのみを集計した。

「非常に熱心に取り組んでいた」…平均 24.7%（SD＝26.77）

「熱心に取り組んでいた」……平均 51.3%（SD＝25.72）

「あまり熱心ではなかった」……平均 19.4%（SD＝18.46）

「まったく熱心ではなかった」……平均　4.6%（SD＝ 9.57）

回答には非常にばらつきが大きいことがわかる。

(5)　体験中に，大きなトラブルや事故などが生じたかどうかの質問には，90.8%の198施設が「いいえ」と回答した。トラブルがあったと回答した20施設の23の回答の内訳は，次のとおりである。

①「学生自身が怪我をしたり，病気にかかった」（6件）

②「学生が利用者に怪我をさせたりした」（1件）

③「学生が体験前に感染症等に罹患したことを知らずに，体験してしまった」（0件）

④「施設の備品や設備を損壊させたり，紛失したりした」（0件）

⑤「利用者の人格や人権を損なう行為があった」（4件）

⑥「利用者のプライバシーにかかわる問題があった」（0件）

⑦「学生や利用者の持ち物がなくなった」（3件）

⑧「体験生や実習生とのトラブルがあった」（0件）

⑨「その他」（9件）

(6)　「体験」前の学生に要望することを，6項目の中から3つ選んでもらった。提示した6項目の内容は次のとおりである。後のかっこ内の数値は，全く無回答だった2ケースを除いた216施設のうち，その項目を選択した施設の割合を示している。なお，平均回答数は2.9個であった。

①「体験の目的や意義を理解してきてほしい」(88.9%)

②「社会的な常識やマナーを身につけてきてほしい（態度，あいさつ，服装，連絡等）」(83.3%)

③「社会福祉施設や利用者に関する基礎的な学習をしてきてほしい」(57.9%)

④「体験の全体的な仕組みやルールを理解してきてほしい（提出物や連絡等)」(34.7%)

⑤「「体験」ではなく，「実習」という気持ちできてほしい」(23.1%)

⑥「その他」(3.2%)

(7)　「体験」を通して学生に1番期待することを，6項目の中から1つだけ選んでもらった。後のかっこ内の数値は，有効回答数213に占める割合である。

①「幅広い体験をし，教職課程で生かしていってほしい」(54.5%)

②「社会福祉や社会福祉施設の役割等への理解を深めてほしい」(18.8%)

③「利用者と積極的に交流し，利用者のニーズや抱える課題等を理解してほしい」(16.0%)

④「自分を見つめなおす機会にしてほしい」(9.4%)

⑤「具体的な援助方法を学んでいってほしい」(0.0%)

⑥「その他」(1.4%)

(8)　「体験」に参加した学生に関する問題点，課題を，8項目の中から3つ選んでもらった。提示した8項目の内容は次のとおりである。後のかっこ内の数値は，全く無回答だった12ケースを除いた206施設のうち，その項目を選択した施設の割合を示している。なお，平均回答数は2.8個であった。

①「積極性，意欲の不足（指示待ち，居眠り等)」(82.0%)

②「社会常識・マナー（あいさつ・返事，各種連絡，服装・身だしなみ，喫煙，携帯電話等)」(72.8%)

③「事前準備や学習の不足」(58.3%)

④「スケジュール管理（遅刻，早退，無断欠席，期日変更，施設オリエンテーションに欠席)」(23.8%)

⑤「学生自身の健康管理」(22.8%)

⑥「関係書類（健康診断書，検便等）の提出忘れ（遅れ)，当日持ち物忘れ」(15.5%)

⑦「施設の方針や職員の指示に従わない」(3.4%)

⑧「その他」(2.9%)

(9)　大学等派遣先へ要望することを，8項目の中から3つ選んでもらった。提示した8項目の内容は次のとおりである。後のかっこ内の数値は，全く無回答だった7ケースを除いた211施設のうち，その項目を選択した施設の割合を示している。なお，平均回答数は2.8個であった。

①「学生への事前指導の充実・徹底」(90.5%)

②「学生の事後学習，フォローアップ」(48.8%)

③「施設との密接な連絡・調整」(34.6%)

④「学生の把握や学生との連絡の徹底」(33.6%)

⑤「提出書類の期限等の厳守」(26.1%)

⑥「施設見学や訪問指導」(25.1%)

⑦「辞退者・変更者が多数生じない措置」(23.7%)

⑧「その他」(2.4%)

なお，学生への事前指導に関する自由記述の中に，「大学の教員に社会福祉施設についての知識が無いのではないか」「施設見学などを実施し，密接な連絡をとってくれる大学は，学生にも自覚や意欲がある」という意見があった。受け入れ施設からは，大学の事前指導の違いよりも学生個人の自覚の方が問題とされる一方で，大学としてなすべきことの徹底と，大学の基本的な方針をきちんと示すことが強く要望されている。

⑽ 「体験」が教員養成（特に教員の資質向上）にとって意味があると思うかどうか，5件法で回答してもらった。集計の結果無回答が5あったので，213回答のうち「大いに意味がある」42.3%，「ある程度意味がある」41.8%，「どちらともいえない」10.3%，「あまり意味がない」5.2%，「ほとんど意味がない」0.5%となった。その理由をみると，肯定的な回答では「体験したこと自体に意味があるはずだ」「意味があるかどうかは体験した学生個人の心構えによる」などが多く，否定的な回答では「制度そのものに疑問あるいは不満がある」などが挙げられている。

5．体験学生に対する「期待」と「現状」について

設定した質問は，介護等体験への「心得（18項目)」「目的意識（13項目)」「専門知識（12項目)」の3カテゴリにわたる計43項目である。この43項目の質問を，「介護等体験」に参加する学生に対して担当職員が「期待」する学生像と，参加した学生の「現状」を表すように文末を変えて，2種類用意した。それぞれの項目に対して5件法で回答してもらい，付した番号のとおりに5点から1点まで点数化して処理した。なお比較のため，両方に回答した196ケースのみを集計・分析に用いた。

(1) 平均値について

「介護等体験」の学生に対する「期待」と「現状」について，それぞれの回答の平均と標準偏差を**表7**にまとめた。

体験学生の心構えや態度に対する「期待」について平均値が高かった5項目をみると，「1．体験を欠席した場合などに，施設への連絡をきちんと行う」「2．教職員や利用者への挨拶や言葉遣いをきちんとする」「20．職員の指示にきちんと応える」「34．利用者のプライバシーや人権・人格を尊重して接する」の4項目が「心得」，「12．中途半端な態度がなく，体験にまじめに取り組む」が「目的意識」であった。どの項目も，福祉の現場でトラブルを回避するのに欠かせない最も基本的な心得である。平均値が低かった5項目は，「7．施設で事故が起こった場合の対処の仕方の知識を持つ」「11．施設で使用する福祉機器，医療機器などについて知識を持つ」「17．基本

表７　社会福祉施設の職員が捉えた学生の資質への期待と現状（Ｎ＝196）

質　問　項　目	期待（A）		現状（B）		A－B
	平均値	ＳＤ	平均値	ＳＤ	
1. 体験を欠席した場合などに、施設への連絡をきちんと行う	4.95	0.355	4.06	1.019	
2. 教職員や利用者への挨拶や言葉遣いをきちんとする	4.89	0.326	3.91	0.772	
3. 体験中の服装や身だしなみをきちんとする	4.55	0.584	3.88	0.748	
4. 介護体験中の学生としての自覚を持って取り組む	4.72	0.524	3.69	0.864	>>
5. この体験で何を行うのかを理解する	4.50	0.568	3.27	0.798	>>
6. 施設の利用者の抱えている問題を理解する	3.60	0.727	2.80	0.845	
7. 施設で事故が起こった場合の対処の仕方の知識を持つ	3.39	0.879	2.37	0.816	>>
8. 体験に参加するだけで単位が認定されるわけではないことを理解する	4.05	0.919	3.09	0.842	
9. 自分が体験している施設の種別（目的など）を理解する	4.09	0.678	3.03	0.944	>>
10. ノーマライゼーションの視点に立って利用者と接する	4.14	0.735	3.17	0.804	
11. 施設で使用する福祉機器、医療機器などについて知識を持つ	2.99	0.922	2.32	0.866	
12. 中途半端な態度がなく、体験にまじめに取り組む	4.74	0.495	3.67	0.749	>>
13. 目的意識を持って体験に取り組む	4.64	0.511	3.40	0.782	>>
14. 利用者から見れば自分も職員の一人と同じであることを理解する	3.53	1.025	2.77	0.760	
15. 「単位のためだ」という態度を見せない	4.28	0.876	3.53	0.885	
16. 自分も障害者になったり、介護を受けたりする可能性のあることを理解する	3.89	0.921	2.95	0.821	
17. 基本的な医学知識、介助知識、服薬知識などを理解する	2.92	0.882	2.34	0.822	
18. 施設の補助業務（掃除・洗濯など）でも真剣に取り組む	4.27	0.738	3.69	0.823	
19. 利用者への声かけやコミュニケーションの仕方を理解する	4.33	0.604	3.24	0.785	>>
20. 職員の指示にきちんと応える	4.74	0.482	4.05	0.622	
21. 利用者にとっての行事・レクリエーション・クラブ活動などの意義を理解する	3.99	0.737	3.35	0.800	
22. 基本的な介助方法やガイドヘルプの方法を理解する	3.43	0.889	2.61	0.780	
23. 利用者の危機回避や生命維持についての基本的知識を持つ	3.55	0.924	2.44	0.805	>>
24. 利用者の入浴・排泄・食事などの介助についての知識を持つ	3.26	0.927	2.35	0.799	
25. 利用者に合わせて十人十色のアプローチをする	3.70	0.880	2.90	0.808	
26. 施設が利用者第一であることを理解する	4.46	0.627	3.43	0.866	>>
27. 実習前に自分の健康診断が必要なことを理解する	4.17	0.932	3.34	0.853	
28. 事前見学の段階から熱心に取り組む	4.00	0.791	3.10	0.801	
29. 体験の受け入れが施設の通常業務の負担になることを理解する	3.43	1.038	2.93	0.765	
30. 施設の職種（寮母・指導員・介助員など）と業務内容を理解する	3.52	0.925	2.81	0.829	
31. 利用者に共感的にかかわることを理解して体験に臨む	4.09	0.736	3.40	0.788	
32. 実習記録をきちんとつける	4.42	0.722	3.85	0.893	
33. 利用者に積極的にかかわろうとする	4.48	0.620	3.64	0.728	
34. 利用者のプライバシーや人権・人格を尊重して接する	4.86	0.392	3.65	0.725	>>
35. 職員に指導や助言を積極的に求める	4.26	0.708	3.26	0.827	>>
36. 職員と協働しようという姿勢をもつ	4.09	0.738	3.30	0.856	
37. 介護の現場を理解しようという姿勢をもつ	4.11	0.783	3.46	0.806	
38. 職員の実践技術を見て、自分の技術を高めようとする	3.22	0.961	2.85	0.846	
39. 利用者のニーズを理解しようと努める	3.90	0.820	3.29	0.841	
40. 利用者と接触することで自己理解を高めようとする	4.09	0.700	3.28	0.882	
41. 利用者の状態（疾患・障害・要介護など）を理解して取り組む	3.80	0.764	2.95	0.827	
42. 利用者とのトラブルに冷静に対処する	3.74	0.789	2.93	0.772	
43. 自分の体験内容を積極的に振り返ろうという姿勢を持つ	4.40	0.637	3.35	0.855	>>

>>：平均の差が１以上

的な医学知識，介助知識，服薬知識などを理解する」「24．利用者の入浴・排泄・食事などの介助についての知識を持つ」の４項目が「専門知識」，「38．職員の実践技術を見て，自分の技術を高めようとする」が「目的意識」である。教職課程の学生に，高度な専門性は期待できないという思いの表れであろう。

体験学生を全般的に捉えた「現状」では，平均値が高かった５項目は，「1．体験を欠席した場合などに，施設への連絡をきちんと行う」「2．教職員や利用者への挨拶や言葉遣いをきちんとする」「3．体験中の服装や身だしなみをきちんとする」「20．職員の指示にきちんと応える」の4項目が「心得」，「32．実習記録をきちんとつける」が「目的意識」であった。基本中の基本であるだけに，ほかの項目より高くて当然であるともいえるが，施設側の期待する項目とほぼ合致している。平均値が低かった「7．施設で事故が起こった場合の対処の仕方の知識を持つ」「11．施設

で使用する福祉機器，医療機器などについて知識を持つ」「17．基本的な医学知識，介助知識，服薬知識などを理解する」「23．利用者の危機回避や生命維持についての基本的知識を持つ」「24．利用者の入浴・排泄・食事などの介助についての知識を持つ」の５項目は，すべて「専門知識」であった。教職課程において，福祉の専門性の高い事前指導はほとんど受けていないと思われる。

双方の平均値を比較してみると，「期待」の方がかなり高いことがわかる。ギャップの大きい項目は「目的意識」の項目が多く，これは参加する学生の「どうせ教職課程だから」という甘えに施設側が不満を持っている表れであろう。

(2)　「期待」の因子分析

主因子法・バリマックス回転による因子分析を行い，５因子を抽出した。累積寄与率は40.3%と低めである。**表８**は，ソート後の因子パターンを示したものである。

表８　「介護等体験」に参加する学生に必要な心構えや態度等（期待）の因子分析結果

質　問　項　目	因子Ⅰ	因子Ⅱ	因子Ⅲ	因子Ⅳ	因子Ⅴ	共通性
17. 基本的な医学知識、介助知識、服薬知識などを理解する	0.727					0.582
22. 基本的な介助方法やガイドヘルプの方法を理解する	0.699					0.555
38. 職員の実践技術を見て、自分の技術を高めようとする	0.699					0.554
30. 施設の職種（寮母・指導員・介助員など）と業務内容を理解する	0.688					0.580
11. 施設で使用する福祉機器、医療機器などについて知識を持つ	0.677					0.549
24. 利用者の入浴・排泄・食事などの介助についての知識を持つ	0.676					0.485
23. 利用者の危機回避や生命維持についての基本的知識を持つ	0.649					0.463
41. 利用者の状態（疾患・障害・要介護など）を理解して取り組む	0.483					0.410
14. 利用者から見れば自分も職員の一人と同じであることを理解する	0.462					0.287
7. 施設で事故が起こった場合の対処の仕方の知識を持つ	0.458					0.302
42. 利用者とのトラブルに冷静に対処する	0.428					0.331
27. 実習前に自分の健康診断が必要なことを理解する	0.350					0.289
29. 体験の受け入れが施設の通常業務の負担になることを理解する	0.202					0.108
18. 施設の補助業務（掃除・洗濯など）でも真剣に取り組む		0.573				0.416
9. 自分が体験している施設の種別（目的など）を理解する		0.570				0.478
32. 実習記録をきちんとつける		0.546				0.366
35. 職員に指導や助言を積極的に求める		0.500				0.420
36. 職員と協働しようという姿勢をもつ		0.497				0.437
28. 事前見学の段階から熱心に取り組む		0.443				0.421
21. 利用者にとっての行事・レクリエーション・クラブ活動などの意義を理解する		0.434				0.492
37. 介護の現場を理解しようという姿勢をもつ		0.411				0.499
16. 自分も障害者になったり、介護を受けたりする可能性のあることを理解する		0.405				0.345
10. ノーマライゼーションの視点に立って利用者と接する		0.366				0.304
8. 体験に参加するだけで単位が認定されるわけではないことを理解する		0.341				0.246
40. 利用者と接触することで自己理解を高めようとする			0.611			0.528
31. 利用者に共感的にかかわることを理解して体験に臨む			0.555			0.470
19. 利用者への声かけやコミュニケーションの仕方を理解する			0.546			0.497
39. 利用者のニーズを理解しようと努める			0.497			0.559
26. 施設が利用者第一であることを理解する			0.496			0.400
25. 利用者に合わせて十人十色のアプローチをする			0.478			0.326
43. 自分の体験内容を積極的に振り返ろうという姿勢を持つ			0.456			0.366
33. 利用者に積極的にかかわろうとする			0.359			0.334
34. 利用者のプライバシーや人権・人格を尊重して接する			0.348			0.273
20. 職員の指示にきちんと応える				0.633		0.582
3. 体験中の服装や身だしなみをきちんとする				0.608		0.388
4. 介護体験中の学生としての自覚を持って取り組む				0.534		0.503
12. 中途半端な態度がなく、体験にまじめに取り組む				0.495		0.370
2. 教職員や利用者への挨拶や言葉遣いをきちんとする				0.470		0.264
1. 体験を欠席した場合などに、施設への連絡をきちんと行う				0.370		0.147
15. 「単位のためだ」という態度を見せない				0.345		0.269
5. この体験で何を行うのかを理解する					0.562	0.395
13. 目的意識を持って体験に取り組む					0.536	0.383
6. 施設の利用者の抱えている問題を理解する					0.429	0.368
因子寄与	5.767	3.528	3.509	2.651	1.886	

因子Ⅰは，「17．基本的な医学知識，介助知識，服薬知識などを理解する」「22．基本的な介助方法やガイドヘルプの方法を理解する」「38．職員の実践技術を見て，自分の技術を高めようとする」等の項目で構成される，『体験のための専門的知識の獲得』因子と解釈した。

因子Ⅱは，「18．施設の補助業務（掃除・洗濯など）でも真剣に取り組む」「9．自分が体験している施設の種別（目的など）を理解する」「32．実習記録をきちんとつける」等の項目で構成される，『体験への前向きな姿勢』の因子と解釈した。

因子Ⅲは，「40．利用者と接触することで自己理解を高めようとする」「31．利用者に共感的にかかわることを理解して体験に臨む」「19．利用者への声かけやコミュニケーションの仕方を理解する」等の項目で構成される，『利用者側に立った体験態度』の因子と解釈した。

因子Ⅳは，「20．職員の指示にきちんと応える」「3．体験中の服装や身だしなみをきちんとする」「4．介護体験中の学生としての自覚を持って取り組む」等の項目から成る，『礼儀正しい体験態度』の因子と解釈した。

因子Ⅴは，「5．この体験で何を行うのかを理解する」「13．目的意識を持って体験に取り組む」「6．施設の利用者の抱えている問題を理解する」の３項目から成る，『体験の目的の的確な把握』の因子と解釈した。

(3)　「現状」の因子分析

主因子法・バリマックス回転による因子分析を行い，５因子を抽出した。累積寄与率は54.9%である。ソート後の因子パターンを**表９**に示す。

因子Ⅰは，「11．施設で使用する福祉機器，医療機器などについて知識を持っていた」「23．利用者の危機回避や生命維持についての基本的知識を持っていた」「24．利用者の入浴・排泄・食事などの介助についての知識を持っていた」等の項目で構成される，『基本的な介護技術の習得』因子と解釈した。

因子Ⅱは，「4．介護体験中の学生としての自覚を持って取り組んでいた」「2．教職員や利用者への挨拶や言葉遣いをきちんとしていた」「3．体験中の服装や身だしなみをきちんとしていた」等の項目から成る，『体験に臨む真摯な態度』の因子と解釈した。

因子Ⅲは，「39．利用者のニーズを理解しようと努めていた」「40．利用者と接触することで自己理解を高めようとしていた」「37．介護の現場を理解しようという姿勢をもっていた」等の項目から成る，『利用者・職員の立場に立った配慮』の因子と解釈した。

因子Ⅳは，「35．職員に指導や助言を積極的に求めていた」「43．自分の体験内容を積極的に振り返ろうという姿勢を持っていた」「32．実習記録をきちんとつけていた」等の項目から成る，『利用者・職員との絆の重要性』因子と解釈した。

因子Ⅴは，「30．施設の職種（寮母・指導員・介助員など）と業務内容を理解していた」「26．施設が利用者第一であることを理解していた」「25．利用者に合わせて十人十色のアプローチを

表 9 「介護等体験」に参加した学生の全般的な印象（現状）の因子分析結果

質　問　項　目	因子Ⅰ	因子Ⅱ	因子Ⅲ	因子Ⅳ	因子Ⅴ	共通性
11. 施設で使用する福祉機器、医療機器などについて知識を持っていた	0.823					0.703
23. 利用者の危機回避や生命維持についての基本的知識を持っていた	0.819					0.712
24. 利用者の入浴・排泄・食事などの介助についての知識を持っていた	0.796					0.687
17. 基本的な医学知識、介助知識、服薬知識などを理解していた	0.779					0.675
22. 基本的な介助方法やガイドヘルプの方法を理解していた	0.773					0.663
7. 施設で事故が起こった場合の対処の仕方の知識を持っていた	0.697					0.615
14. 利用者から見れば自分も職員の一人と同じであることを理解していた	0.497					0.469
6. 施設の利用者の抱えている問題を理解していた	0.445					0.515
16. 自分も障害者になったり、介護を受けたりする可能性のあることを理解していた	0.421					0.384
9. 自分が体験している施設の種別（目的など）を理解していた	0.379					0.468
4. 介護体験中の学生としての自覚を持って取り組んでいた		0.746				0.694
2. 教職員や利用者への挨拶や言葉遣いをきちんとしていた		0.734				0.583
3. 体験中の服装や身だしなみをきちんとしていた		0.658				0.528
12. 中途半端な態度がなく、体験にまじめに取り組んでいた		0.594				0.652
5. この体験で何を行うのかを理解していた		0.576				0.595
20. 職員の指示にきちんと応えていた		0.544				0.523
13. 目的意識を持って体験に取り組んでいた。		0.536				0.614
8. 体験に参加するだけで単位が認定されるわけではないことを理解していた		0.533				0.547
15. 「単位のためだ」という態度を見せなかった		0.525				0.490
1. 体験を欠席した場合などに、施設への連絡をきちんと行っていた		0.524				0.294
10. ノーマライゼーションの視点に立って利用者と接していた		0.436				0.544
18. 施設の補助業務（掃除・洗濯など）でも真剣に取り組んでいた		0.419				0.419
39. 利用者のニーズを理解しようと努めていた			0.682			0.642
40. 利用者と接触することで自己理解を高めようとしていた			0.611			0.621
37. 介護の現場を理解しようという姿勢をもっていた			0.564			0.609
38. 職員の実践技術を見て、自分の技術を高めようとしていた			0.554			0.575
41. 利用者の状態（疾患・障害・要介護など）を理解して取り組んでいた			0.550			0.584
36. 職員と協働しようという姿勢をもっていた			0.523			0.632
34. 利用者のプライバシーや人権・人格を尊重して接していた			0.521			0.519
31. 利用者に共感的にかかわることを理解して体験に臨んでいた			0.509			0.566
19. 利用者への声かけやコミュニケーションの仕方を理解していた			0.504			0.498
42. 利用者とのトラブルに冷静に対処していた			0.486			0.455
21. 利用者にとっての行事・レクリエーション・クラブ活動などの意義を理解していた			0.480			0.540
35. 職員に指導や助言を積極的に求めていた				0.641		0.633
43. 自分の体験内容を積極的に振り返ろうという姿勢を持っていた				0.570		0.601
32. 実習記録をきちんとつけていた				0.459		0.317
33. 利用者に積極的にかかわろうとしていた				0.452		0.575
30. 施設の職種（寮母・指導員・介助員など）と業務内容を理解していた					0.526	0.654
26. 施設が利用者第一であることを理解していた					0.493	0.571
25. 利用者に合わせて十人十色のアプローチをしていた					0.449	0.504
28. 事前見学の段階から熱心に取り組んでいた					0.436	0.390
29. 体験の受け入れが施設の通常業務の負担になることを理解していた					0.392	0.448
27. 実習前に自分の健康診断が必要なことを理解していた					0.345	0.306
因子寄与	6.518	5.826	5.713	2.911	2.642	

していた」等の項目で構成される，『利用者への接し方の正しい理解』の因子と解釈した。

Ⅳ．まとめ

今回，学生を受け入れている社会福祉施設の側から，「介護等体験」についての貴重な意見を聞くことができた。そこから見えた「現状」は，やはり現場と大学，あるいは学生自身との温度差であったように思われる。教育課程の中に組み入れられた「介護等体験」であるから，その事前指導には厳しい制限がある。しかし，大学側の担当者が福祉の現場を知り，高い目的意識を持った学生を送り出し，一方で学生の実力を施設側に理解していただく努力をしていかなくてはならないだろう。「介護等体験」は，お互いに意義があると認識している制度であるから，より大きな成果を期待したい。

＜付記＞

(1) 東京都社会福祉協議会「介護等体験」ご担当（当時）の池田明彦氏には，本研究の調査実施に際して全面的なご協力をいただいた。

(2) 本研究は，平成13年度城西大学学長所管研究奨励金の交付を受けて実施された研究の一部である。

＜参考文献＞

1) 佐藤嘉晃・藤田主一・和田美知子：「『介護等体験』実習に関する教育心理学的研究――教職課程履修学生による実習後調査に基づいて――」．2000，城西大学女子短期大学部紀要，第17巻第１号．

2) 佐藤嘉晃・和田美知子・藤田主一：「『介護等体験』実習に関する教育心理学的研究――（その２）教職課程履修の大学生による実習後調査に基づいて――」．2001，城西大学女子短期大学部紀要，第18巻第１号．

3) 佐藤嘉晃・和田美知子・藤田主一：「『介護等体験』実習に関する教育心理学的研究――（その３）教職課程履修の大学生による調査を通して――」．2002，城西大学女子短期大学部紀要，第19巻第１号．